



鐘の着物

著者	萩原 健次郎
雑誌名	文化情報学
巻	3
号	1
ページ	58-62
発行年	2008-03-31
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011742

講演の付録（詩）

鐘の着物

萩原 健次郎

二〇〇七年十月十一日に、同志社大学学生支援センターと同志社大学文化情報学会主催のビデオ上映会が同志社大学寒梅館ハーディーホールで行われました。その折の記録は本誌25～31頁に掲載しております。当日、萩原健次郎氏によって朗読された自作の詩をここに縦書きで掲載します。

それは、水の話なのか、花の話なのかわからない。いのちの話などでもない。光の人をどこかへ隠してしまおう企みとでもいうのだろうか。

隠し場所から、私たちの感覚器官が狙われることだつてある。隠し場所に、吸い上げられる。

考えてみれば、私たちはガラスで会話してきた。もぐもぐと口ごもりながらも、くすくすと笑みをもらして、永遠をどこかに投げ捨てて、口に布を巻き、閉ざして、それから距離も、こっそりと隠してしまった。

隠し場所は、
ガラスの眼で包んで、しまっておかないとね。



どこかの、隠し場所？

たとえば、水の話だでしょう。

それは、ゆえない。

水の踊り子の話だでしょう。

手が流された、温かい思い出のことをよみがえらせよう。海にいたとき、川にいたとき、私たちは、空気のようそこに住んでいた。手が流されても、足が流されても、それは普通のことだった。

焼かれることも

煙になることも

死んだ人を哀しむことも

死んだ人を抱くことも。

手が流されていた日のことを思うと、どんなことも普通のことだった。私たちは、みな水の踊り子だった。

ゆらゆらしていた。

どんな感情も、水中で燃やされた。



花の話だでしょう。焦げた、いのちを抜かれた、者たちのたとえだとして、かなしいかい？

あなたの体温は、もう果てまで凍えてしまって、身体のみずみずが、痛くて痛くてしょうがないのに、なにも語りだすことができない。でも、踊ることだけはできる、狂れた人のように定着して、どこにも移動できない、見る人になれないことの悲惨さ、見られるばかりの、陽の人になってしまっていること、なんたる皮肉よ。

あるとき、あなたは、生きている花を百本胸にかかえて、やってきた。

あなたは、鋭く光る金属を予兆させた。

あなたは、まるでナイフで

スルスルスルと簡単に切り落とされた切片だった。

違う世界ではなく、この世の蔭で泣く犬だった。狼だった。狼のナイフだった。泣く声のナイフだった。過去だった。記憶だった。

オオオオオオンだった。

かなしいかい？

かなしいかい？
亡くなることが。

◆
反対に歩いている人を見かけたことがありますか。反対に吠えたり、反対に泣いたり、

あの、あの、あの世の花のように、蔭で快活に陽を求めずに反対に咲く人々のことを。

◆
その細い肩は、どんな時間にも流され続けた、あきらめのようなだった。喉から絞り出すように出てくる声もまた、大陸の長い山脈を伝う嘘の手紙で、芝居の時の、太古の眼が、いままで見たこともない湖よりも弱く澱み、緑から濃緑になり、黒になり、次に闇で、器官を吸わす身の人になれと強要するちいさなミカドになったり、雨降らず、呪術的な動物だったり、並んで濃密

に、私たち人間を窒息させる。あるいは、窒息していた目を思い出させる、身軽な魔女だったり幼女だったり、糸の肩からは想像もできない、飲料水？大陸の長い山脈を伝う、甘い鼻水や体液だったり、

◆
いのち語、細い肩の弱い声は、いつもひるがえって眼を、さらさらの蒸留水のように、ひたすら飲み込む。

◆
遠い山脈のいのち

細いひと、濃緑の眼の

ナイフ、狼

暗い、声

泣き声の、筒

かなしい施設

肩、手、髪、指、

絹、ドレス、スカート、衣裳



もっと、いきては、いけない。もっと泣いては、いけない。

もどつても、いつても、切片の間で私たちは、いつも遠くから観察する者で、描かれる、泣く対象で、移動者で、定着しない。



着物の人の、あるいは、光の人の側からしきりに発せられる、声を聴いている。それは、空気という、いきした隙間のない、濃密な塊で、人の声というのは、どんな角度から見ても確認することができない。黒衣、時に紗のかかった、レースの布がかかった立法体の、砂地や、原始の岩礁だったり、異星のこのように、ハ

ミングがなっていたり、それは、キュービクなもの。のたとえとして、見る人の瞳の中いっばいに埋まる。



エレガントな音楽の間に
ふつと律動して

どこかへ、連れていく

ここのいい、油断といえは
それはそれで

私たちの

胸にかかえている童話の質を
計る、スケールのように
消えそうな、肉体の線は
ほほえんでいる

ほほえみ

といえは、いつも距離があり
すこしだけ、霧のかかった
それもまた、ノイジーな優雅で

けっして、自分のいのちを
花にたとえたりせず

「私は、ただかなしかっただけ」
といさぎよく泣いている
液質の女のこのように

ただ、もどる家や、
恋愛の思い出も

悔恨を持たず

悔恨の色を持たずに、ずっと

たたずんでいた

唄っていたり、踊っていたりする

そんなお話のような気がする。



私は、遠くで鳴っている鐘の音を着た、あなたを愛した。

童話を捨てた。

いのちを、かえりみななかった。

私は、

糸の肩に遭難した。

私は、その細い肩を抱いた。

私は、抱かれた。

私は、

私は、

私も、

鐘を着ていた。